

# 名戸ヶ谷ビオトープだより

第49号 2012年春号

名戸ヶ谷ビオトープを育てる会発行

<http://nadogaya-biotope.org/>

発行責任者：篠崎 将 Tel/Fax: 04-7173-6353

## 春山房子さんが詩集を出しました



## 「冬晴れの日に」

当会の会員でもある春山房子さんが初めての詩集「冬晴れの日に」を出版しました。（発行所：詩人会議出版 2000円）

あとがきによれば、「2003年頃から詩のようなものを書くようにりました。それまで詩は読むことはあっても難しいという印象が強く、作ることは考えたことはありませんでした。」

しかし、遠ざかっていたのが、2009年9月頃から再び書き始め、昨年6月には50編を超え、詩人会議からの呼びかけもあり、詩集発行に踏み切ったとあります。

房子さんの詩は、やさしい言葉で書かれていて、家族への思いなど、

誰しも心あたりがあるような内容

の、わかりやすいものです。3月20日の合同作業に参加して、その作業を歌った作品「彼岸の日に」を送って頂きました。（なお、春山さんからは、ビオトープを育てる会会員さんには希望者に上記詩集をさしあげますとのこと。ご本人または高田までご連絡ください）



春山房子さん

彼岸の日に

春山房子

トン トン トン トン

木道延長作業の音

寒い朝の彼岸の日

久しぶりの陽ざしを背に

十数人のツワモノたちが

資材を運び 釘を打つ

チヨロ チヨロ チヨロ チヨロ

この日敷かれたパイプを通し

湧水からの水が

ホタル用水路に流れこむ

今年 春一番は来なかったね

明日からは春二番か

作業後のベンチでは

喉を潤す笑顔の会話

絶滅危惧種の

ヒメヘビイチゴを確認

ニホンアカガエルの卵塊も孵化し

オタマジャクシが泳いでいる

絶滅しそうなものを

絶滅させまいと

絶滅危惧種のような人たちが

陽だまりのなか

一息ついている

二〇一二年三月

# 名戸ヶ谷ビオトープを育てる会 第10回総会の報告

当会の第10回総会は、先にご案内したように、1月21日、名戸ヶ谷ふるさと会館で18名の出席（ほかに委任状6名）で開催され、役員会からの活動報告、活動予定、決算、予算すべて承認されました。

柏市環境保全課の中山副参事が来賓として出席され、挨拶を受けました。

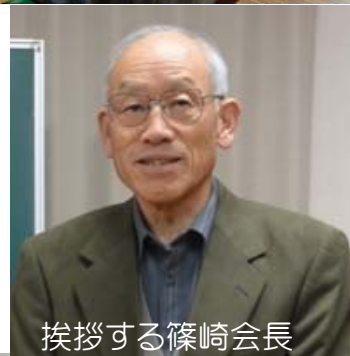
注目点は、2012年の年会費は1000円とすること、同一家族に複数会員がいる場合も1000円とすることが承認され、早速今年の年会費から適用になります。

なお、今年度の役員は任期が2年で改選時期ではないため変更ありません。

総会終了後、当会の佐々木幹事から、植物の保全についての講演があり、そのあ



総会風景



挨拶する篠崎会長

よって、植物の多様性が守られるということで、名戸ヶ谷ビオトープは多様な湿性植物がすべてそろっているという状況です。（右下図）

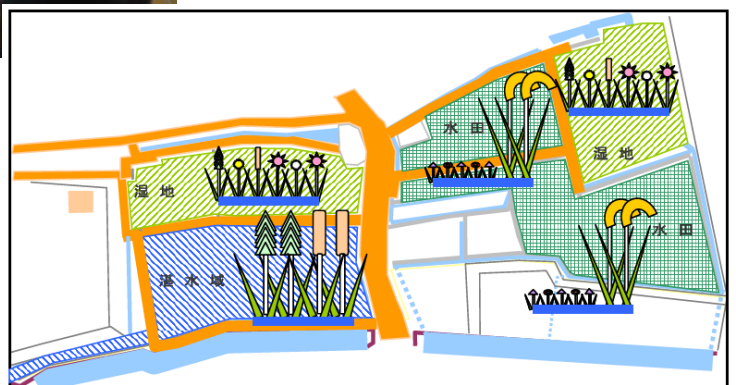


懇親会風景  
(左)  
講演する  
佐々木光正  
氏(右)



と、久米さんが幹事となって、懇親会が行われ、意義ある一日となりました。

佐々木さんのお話は、里山の場合と類似の考え方ですが、適度な攪乱（河川の氾濫など自然現象、人間による樹木の間伐、耕作など人為的なもの）に





# コメの生産原価を考える(その1)

名戸ヶ谷ビオトープでは有機栽培、不耕起栽培によって、うるち米、もち米の栽培を行っています。

このコメの生産原価がどうなっているかなど考えたこともありませんでした。しかし、農家ではそうはいきません。兼業で自家消費だけを生産しているとかであればともかく、コメの販売を大きな収入源としている農家にとっては、コメの生産原価がどうなっているのか、JA（旧農協）などへの引き渡し価格がどうなるのかは最大と言ってもいい関心事です。

そのために、米価は政治問題でもあるし、今問題になってきているTPP交渉でどうなるのか、また、ミニマムアクセスなどにより、すでに外米が入ってきていますが、この価格と食味には大きな関心が寄せられています。

そこで、コメの生産原価はどうなっているのか、調べてみました。

農林水産省の統計 e-STATというのがあり、膨大なデータが公表されています。（最新は3/16日付け、H22年度分）

全生産費（苗、肥料、農機具などの資本費、労賃（家族労働も含む）などを一定の基準で評価して入れたもの）の分布があり、50%の累積を見ると、60Kgあたり14,500円（玄米）となっています。

これに対して、JAが引き取る価格は、等級、品種などにより相違しますが、今年の早場米で一等米でだいたい1万2千円見当です。（消費者が購入する精米価格は、ここ

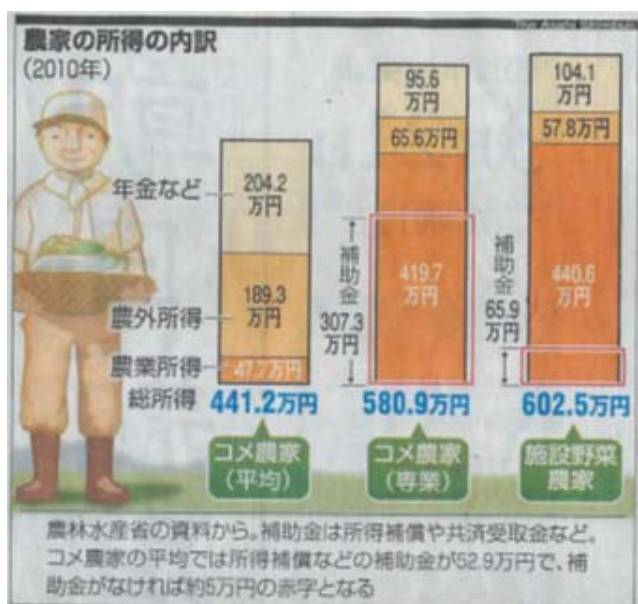
では考えません）

こうなると、今の米価は平均的には赤字になるということです。

これに対して、所得補償という制度があり、これも所得を補填するものとなっています。

調べれば調べるほど米価問題は複雑怪奇です。しばらくこの問題を追います。

（高田）



農家の所得内訳を見た朝日新聞記事（上の図表も含む 2012/3/21付け）

福井県越前市で1ヘクタールのこじんまりした農家の場合、コメは96俵で110万円、所得保障が30万円で収入計147万円、これに対して経費は田植機の減価償却なども含んで177万円。差引30万円の赤字だったがサラリーマン兼業なのでやっていけるといふ。

## 編集後記

いろいろたくさんのお原稿をいただき、なんとかまとまってきました。ただ、佐々木さん、篠崎さんから、そろそろ種切れと言われており、今後どうしていくか頭の痛いところ。会員の皆様からのアイデアが頼りです。

これから暖かくなり、田植えなども近づいています。名戸ヶ谷小の生徒さんの稲作参加は、放射能問題があつて、まだ見えない状況ですが、ビオトープの放射能は、現時点では柏の平均的な値ぐらいで、特に心配する必要がない状態のようです。いずれはこの問題も取り上げていきたいと考えています。なお、春山房子さんの詩集発行をトップ記事に取り上げました。ご本人からは気恥ずかしいとの声もありましたが、すべて編集担当の責任です。

（高田昭治）

# 藪崎家屋敷林

藪崎家は旧沼南町の箕輪地区の農家です。広い屋敷林は藪崎家を支える大切な役割を果たしてきました。

林は広いススキ草地も持っていました。藪崎家はこの林から燃料や建築材を、ススキ草地からは屋根葺き材と肥料を得て、それらを生活に役立ててきました。こうして林と草地は絶えず人手が入り、その結果明るい林と草地が長い間維持されてきたのです。この明るい林と草地に多彩な草花が住み着き、屋敷林は多様な植物に恵まれた場所となりました。

しかし、1900年代半ば頃から大量の石油と安価な輸入材が出回り、林の利用がなくなりました。また、農家の屋根も変わりススキの茅葺きを必要としなくなりました。だが、藪崎家では、屋敷林の利用がなくなった後も林下の下刈りなどの手入れを続けてきました。そのお陰で、林下に住んでいた多彩な草花が今も残されてきたのです。

草花は一年中見ることが出来ます。春はセンボンヤリやヒトリシズカ、そしてキンランの大群生。夏は林立するヤマユリやコバギボウシ。秋が訪れると、ススキ草地に住み着いた花々が現れます。ツリガネニン



藪崎家屋敷林遠景

ジン、ワレモコウに始まり、オミナエシ、アキノキリンソウ、オケラ、センブリと続きます。

この屋敷林と多彩な草花を護ってゆくためには、林を明るく維持してゆくことと林下の下刈りが継続されることが必要です。藪崎家のお許しを得てボランティアグループが間伐を行っています。これからも必要なお手伝いをするつもりです。

藪崎家屋敷林は私有地です。観察を希望される方は私に連絡をお願いします。お勧めしたい観察時期は、キンランの5月初旬、ヤマユリの7月下旬、オミナエシの9月です。 (文・写真 佐々木光正)



ヒトリシズカ



キンラン



ヤマユリ



ツリガネニンジン





オミナエシ



アキノキリンソウ



オケラ



センブリ

作業日誌から  
 3/20(合同) 本年の最初の作業  
 ホタル水路の整備(パイプ設置、ヨシ刈りなど)  
 ヒメヘビイチゴの保全



今年は春一番はなかったようです。やや薄ら寒い日でしたが、10人以上の参加で、ホタル水路への導管設置、ヒメヘビイチゴの保全作業などを行いました。

水流確保のための導管は、塩ビパイプに穴をあけたものを小笠原さんが用意しました。

これによって、ホタル幼虫放流予定の水路に一定の水流が期待できるでしょう。

写真上は、ホタル放流予定水路への溝と導管設置作業。右および下は、絶滅危惧種のヒメヘビイチゴの保全作業





# 日本アカガエル卵塊発生状況



日本アカガエルの卵塊数を時系列的に調査しました。（下表と左図）

月/日	卵塊数 (Aゾーン、Bゾーン)
2/26	14 (12, 2)
3/4	18 (15, 3)
3/11	39 (33, 6)
3/19	27 (21, 6)*



\* 孵化始まる

## 3月19日の状況

北風が強く吹いてまたまた寒い日となりました。

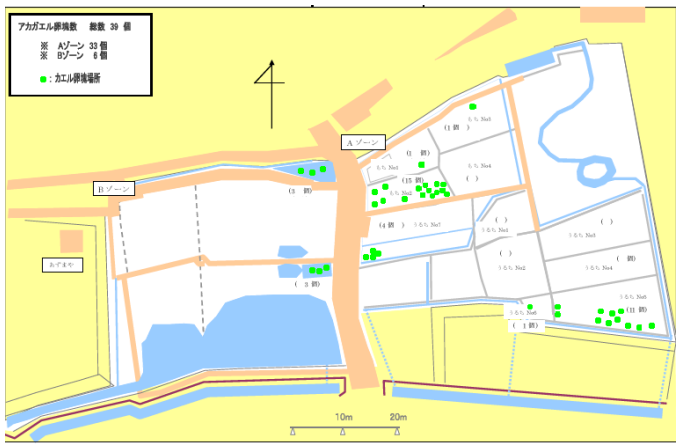
約1週間ぶりですが卵塊は崩れて大幅に減少で、既に孵化し小さなオたまじゃくしが群れてじっとしていました。

うち No7 は 全て孵化済み、もち No2 の一卵塊が孵化済みで数も大幅に減っていて新規は2個でした。

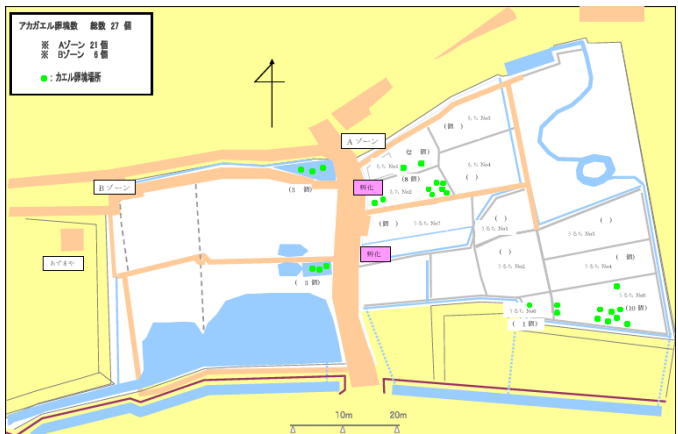
(もち No1とうち No5)

左の図は、上から2/26, 3/4, 3/11, 3/19 の卵塊分布状況です。(緑の点が卵塊を示す)

(生きもの担当 藤平)



下写真はオタマジャクシ発生状況



# ビオトープとわたし 久米 正宏

突然「ビオトープとわたし」の原稿の依頼がメールで舞い込み、確か1年ほど前に「新役員紹介」の項で、プロフィールだけでなく関連記事も書いたのになあーと思ひ少し逡巡していましたが、「名戸ヶ谷ビオトープだより」の編集者のご苦労にも思ひを馳せ、また拙い筆をとることにしました。

早いもので、私のビオトープでの活動も3年になります。でも正直、未だにビオトープの何たるかは殆ど解っていません。唯、家の近くにあり、大分前に、3人の子供達が小学校の折、田植えをした場所であり、「名戸ヶ谷湧水」として、ここの水を求めて行列が出来たほどの名水？の場所であった位の知識でした。

パンフレットには、「ビオトープは多様な生きものの生活空間であると共に、生きものとの共生を考え、地域の学校の環境教育の場となることを期待します」とあります。

この3年間は主に稲作のお手伝いをさせて戴きました。不耕起農法＝自然農法＝何もしない農法・・・だからこそビオトープの稲作は「自然農法」でなければならない訳が少し解って来ました。ここでの稲作は、ご存知の通り、田植え、田の草取り、稲刈り、天日干し、脱穀とすべて手作業です。特に、田植え、草取り、稲刈りは粘性の強い泥と深さに足を取られながらの作業で、脚の付け根までの長靴を履いて、かがんでの作業は、少々馬力のある私でも辛いものが有ります。会員の方々も全体に高齢者年代が多く、この先益々「自然農法」に磨きを掛けて行かねばと思うこの頃です。

また一方で、この活動の一環として、昨年より「名戸ヶ谷保育園」で「野菜づくり」を指導しています。「食育」とでも言うのでしょうか？「食べる野菜がどのようにして出来るのか、自然の恵みや、世話をすることの大切さを、実際にやってみて肌で感じ取って貰う」ことを目的としています。



若い先生方と小さな子供達といっしょに、いろいろな野菜を育て、収穫することの喜びを分かちあっています。残念ながら、放射能の問題で、折角いっぱい取れた野菜が子供達の口に入ることはありませんでしたが・・・私の孫の世代の子供達に「くめセンセイ！！」と呼ばれるのはうれしくもありますが、先日、じゃがいもの植え付けを皆で楽しくやっていた時のことですが、「くめセンセイはおじい

ちゃんだね」と女の子にボソツと言われたのにはちょっと参りました。子供は本当に正直ですね。

これからも、「わら一本の革命」の福岡正信先生の本のあとがきの「風心」にもある、「田も耕さず、肥料もやらず、農薬も使わず、草もとらず、しかも驚異的に稔った。この1株の稲が教えてくれる緑の哲学なのだ・・・」を胸に秘めつつ、「人と生きものが響き合う自然」を守り育てながら気の合う仲間と「名戸ヶ谷ビオトープを育てる会」の活動の時間を大切にして行きたいと思います。

どうぞ、これからも宜しくお願い致します。



# 鳥の一生

カッコウ科の鳥を除き鳥は卵で産まれて、その卵を親鳥がある期間、抱卵して温め、孵化させます。抱卵期間は種によってほぼ一定で、スズメで2週間、カラスで3週間かかります。日本の鳥で親鳥が自分の卵を抱かないのはカッコウ科だけで、それぞれオオヨシキリやウグイスなど決まった種類の巣に卵を産んで、仮親といわれるそれらの鳥に卵を温めさせ、雛を育てさせます。この習性は托卵と言われ、世界のさまざまな鳥に見



られます。孵化した雛鳥は、コアジサシのように羽毛が生えていてすぐに歩けるようになる種と、多くの小鳥類のように丸裸で生まれ、親鳥の全面的な保護が必要な種があり、それぞれ早成性、晩成性といわれています。

早成性の雛は、すぐに巣を離れます。晩成性の雛は巣に留まり、親鳥に給餌されたり、抱かれて体温を維持したりしています。雛が巣にいて親鳥の世話を受けている期間は、スズメで約2週間、カラスで4~5週間、ビオトープで観察されるカルガモは26日前後とされています。晩成性の雛が巣を離れることを巣立ちと言いますが、巣立った後も引き続き親鳥の給餌を受けることが多く、電線に止まってエサをもらうツバメの姿もよく見かけます。巣立ってからしばらくして、幼鳥は全身の羽が換羽します。スズメなどは、この段階で親鳥とそっくりになりますが、カモ類のように若鳥として成鳥とは違う羽色になる鳥もいます。手賀沼や大津川河口でよく見かけるコガモやマガモはこの類です。凶鑑などでエクリプスというのは、この若鳥の羽色のことです。多くの小鳥類は1年で繁殖行動に入りますが、タカなど大型の鳥では、

数年かかるものもいます。鳥の寿命は幼鳥や若鳥は死ぬ割合が高いため、平均寿命は1年に満たないと考えられています。しかし次の繁殖期まで生き延びたものは、小鳥で数年、カラスなどは十数年の寿命があるといわれています。

繁殖行動を観察するにあたって注意しなければならないのは、この時期鳥たちは神経質になっていて、特に子育て中は子どもを放棄してしまうことがあるからです。親鳥が雛にエサを運んでくる様子は微笑ましい光景ですが、親鳥に悪影響を与える恐れが十分にあります。庭で営巣するヒヨドリやキジバトのように、十分人馴れしている鳥で観察するよう心掛けたいものです。特に写真撮影は望遠レンズを使っても近距離で長時間待機しますので親鳥にとっては大きなプレッシャーです。趣味のために鳥の生活に悪影響を及ぼすことは慎まなければなりません。個人の趣味であっても、環境への負荷を考えなければならない時代になってきています。ビオトープには渡り鳥も来ますが、2011年には26種の鳥が観察されています。

(文・写真：篠崎 将)